



Title	中国における朝鮮族のキリスト教信仰に関する人類学的な考察
Author(s)	齊, 雨蒙
Citation	
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/100484
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

中国における朝鮮族のキリスト教信仰に関する人類学的な考察

斉雨蒙 (外国学・M2)

1. はじめに

延辺朝鮮族自治州は、北朝鮮と中国との国境に位置し、北朝鮮と豆満江を隔てる。19世紀に朝鮮半島北部での凶作と20世紀以降の日本の植民地支配の結果、破産した農民や抗日運動に関与した朝鮮人の一部が続々と延辺に移住した。中華人民共和国が成立する前夜、延辺ないし中国の東北地方へ移住した朝鮮人は共産党に少数民族として認定され、建国後は延辺朝鮮族自治州において「民族区域自治」の形で生活する。現在、中国に居住する約170万人の朝鮮族のうちに、約60万人が朝鮮族自治州に居住している。

1980年以降、中国では信仰の自由が徐々に回復し、朝鮮族において主要な宗教であるキリスト教活動も再び活動を展開するようになった。1989年から2005年にかけて、延辺におけるキリスト教施設の数はいくつから222箇所へと増加し、信者の数も1万人から4万人へと拡大し、いわゆる宗教ブームを迎えた。特に、延辺におけるプロテスタントの諸教派の中で、ペンテコステ派は著しい発展を遂げた。

ペンテコステ派に関する人類学的研究においては、伝統的な実践と新たな信仰の間に生じる緊張関係が一つの重要な文脈であり、在来の象徴実践がキリスト教実践での継続が議論されてきた(e.g. Robbins, 1998)。近年の研究では、ペンテコステ派の地域を超えた共通性よりもローカルな要素のみを重視するアプローチは、改宗者が過去と区別しようとする積極的な努力を矮小化する傾向があると指摘する(Robbins, 2007)。しかし筆者は、キリスト教による変遷を継続性の対極として捉えるアプローチは、継続性と変遷がキリスト教で同時に存在する可能性を見落とす危険性があると考えている。

筆者が朝鮮族のペンテコステ派教会での観察では、キリスト教という新しい宗教経験は、表面的には巫俗などの前キリスト教的実践とは大きく異なるが、内在的には類似性が潜んでいる印象を得た。朝鮮族の信者たちは、祖先崇拝などの習俗において、回心した現在と過去を区別しようとする傾向は否定できないが、筆者は、朝鮮族のキリスト教実践は、過去の伝統を一定程度残す一方、ローカルな文脈が信仰の様相にかなりの影響を与えていることを確認した。そこで研究は、延辺で盛んとなったペンテコステ派のキリスト教について考察し、キリスト教のローカルな実践がどのように現地の伝統の影響を受けているのを考察することを目的とする。

2. 延辺におけるキリスト教の歴史

19世紀後半、清朝が中国東北部に対する閉鎖が解除される以降、朝鮮人が東北部への移住は公式的に認められ、延辺における朝鮮族社会が徐々に形成された。朝鮮人の大規模な移住とともに、キリスト教も延辺へと伝来した。20世紀前半の満洲では、プロテスタント、カトリック、さらには様々な民族宗教が、特定の政治目的を達成するための武器として利用されていた。その中、朝鮮半島の影響を受けたキリスト教は、延辺の朝鮮人にとって、自分を植民地支配からの解放を可能にするイデオロギー的武器として認識され、急速に広まった。加えて、朝鮮人はキリスト教を媒介として学校を設立し、さらに多くの反日武装組織を結成した。キリスト教諸教派のうち、長老派は特に注目に値する。キリスト教団体と独立運動の連合に対して、帝国政府はキリスト教団体を「不逞鮮人」という日韓併合後に作られた新たな造語で括り、それを取り締まるために「不逞」や「民心を動揺させる」の領域を抗日運動から宗教活動まで拡張した。キリスト教を隠れ蓑とする独立運動の進展に伴い、帝国政府は不満が増え、最終的には間島への出兵に至った。間島出兵と三矢協定締結の結果、キリスト教をもととする独立団体と学校などは急速に弱体化し、排日主張を放棄して、民族独立団体から純粋な宗教団体へと転向した。その後、日本は満洲における朝鮮人キリスト教の六つの教派を「満洲朝鮮基督教連盟」に統合し、教派の間の違いを消去し、宗教活動を統制し

ていた。

中華人民共和国が成立した後、旧「満洲朝鮮キリスト教連盟」に属する諸教派は、政府の統制によって合同礼拝の形で活動を継続する。前述した歴史的な理由で、現在の延辺では、プロテスタント信者が宗教の主流であり、さらにペンテコステ派を含める大部分の教会は長老派と自称する状況が発生した。

3. 今日のキリスト教の組織構造

中国では法律上、「宗教場所」と「非宗教的場所」の線引きをし、すべての宗教活動を宗教場所に局限する。キリスト教においては、「三自愛国委員会」をはじめとする政治体制のもとで「宗教場所」の管理を実施する。しかし、すべてのキリスト教会は政府が承認する宗教場所で活動するわけではなく、宗教場所で活動する「公認教会（三自教会）」と信者の自宅などの宗教場所ではないところで活動する「家庭教会（地下教会）」という二つのカテゴリーに分ける。

このような状況のもと、公認教会は政府の管理に服従しなければいけないが、宗教活動を行う権利は法的に保障されている。それに対して、家庭教会はより自由な宗教活動を実施可能だが、政府に取り締まられる可能性を直面している。一方、特定の政治的・社会的事件が起こる際、公認教会と家庭教会のいずれも活動の制限をうける可能性がある。

このような状況に対して、公認教会の信者は、自らの活動を「脱宗教化」し、制度の「外」に置くことで、政府の規制を回避しようとする傾向が見られる。一方、家庭教会の信者は、公認教会との関係を可能な限り構築し、制度の「内」に位置づけられることで、政府との対立を避けようと試みている。斯くして、公認教会と家庭教会の信者は異なる戦略を通じて、宗教活動の持続と政治的リスクの回避を図っている。

4. ペンテコステ派の儀礼と恨の声

延辺におけるペンテコステ派の儀礼は、主に日曜礼拝、祈禱会、祈禱山での集会を中心に行われ、異言を語ることや按手による癒しが重要視されている。さらに、朝鮮族の祈禱は「通声祈禱（통성 기도）」とよばれる独自の形で行われる。「通声祈禱」では、信者は一緒に祈禱文を読み上げるのではなく、一人一人異なる内容を、しばしば泣き・叫びしながら祈禱し、その聴覚的な体験は喪家の慟哭に類似する。

「恨（한）」は韓民族独自の概念であり、復讐できなかつた不公正と、韓半島の歴史で押し付けられた集団的なトラウマに起因する怨恨である。「恨（한）」は口承文芸「パンソリ（판소리）」などの伝統芸能において、耳ざわりな濁声や両手を上げることなどの身体的な実践を通じて表現される(Willoughby, 2000)。一方、朝鮮族の「通声祈禱」においても、信者はしばしば詰まった喉で荒い音を発し、哀傷や苦痛を感じさせ、パンソリで哀嘆を表現するのに使われる定式化された動作のように、両手を頭の上に挙げる。こうした身体的な表現は、外部から見ると「恨（한）」の表出として理解されることがある。

一方、このような「恨（한）」の身体表現として捉えられる身体実践は、信者たちにとっては「聖霊に満たされる」の身体表現の一つとして捉えられ、主体の意図を超えた神聖な身体動作として認識される。このように、「通声祈禱」での身体実践は、伝統的な「恨」の表現と共通する同時、キリスト教的な文脈で新たな宗教的意味が付与される。

5. 病の所在と治療

改革開放後、中国における移動への制限が解除され、延辺の朝鮮族の間では韓国への出稼ぎが一般化した。こうした背景で、離婚率の上昇、夫婦別居の長期化、「留守児童」の増加などの現象が大量に発生し、学者や現地の人々に社会の危機として認識された。さらに、出稼ぎによる家族別居、偽装結婚、ビザの不正申請にかかった大金などは社会で激しく批判され、金銭への欲望、享楽主義や「家庭を重視する伝統美徳の喪失」なども社会の非難の標的となった。こうした出稼ぎに引き起こされた社会的な変化は、地域社会のモラル的な規範を規定する文化的なプロセスで、一種の「病」として認識されている。

延辺のペンテコステ派教会で癒しの焦点となってきたのは、正にこうした「病」として捉えられた社会的な危機である。出稼ぎによって引き起こされた金銭への捻じ曲げた欲望は、延辺のペンテコステ派教会において悪魔的な

ものとして位置づけられ、また、家族関係の崩壊と同様に癒しの対象となる「病」として扱われる。大規模な海外出稼ぎによってもたらされた朝鮮族社会への一連の影響は、学者や社会の言説において「社会の疾病」と非難される一方、キリスト教の実践においては、それがより具体的に悪魔や宗教的な病として想像される。さらに、個人的な不幸の蓄積によって引き起こされた「恨(한)」も、信者たちの語りの中で癒されるべき「病」として認識されることがある。

6. まとめ

本研究では、延辺における朝鮮族のキリスト教の交錯した歴史をたどり、「三自愛国委員会」の宗教管理という文脈のもとで、中国における朝鮮族キリスト教の現状を明らかにした。さらに、ローカルな要素としての「恨(한)」、出稼ぎに伴う家族の別居、そして金銭への捻じ曲げる欲望といった社会的変化が、過去との断絶を強調するキリスト教の枠組みの中でどのように継承され、再解釈されてきたのかを考察した。

また、「聖霊に満たされる」などの経験に見られる身体的実践が、憑依と類似した感覚を伴う点についても言及したが、それに関しては今後の課題として残る。

参考文献

- Robbins, J. (1998). Becoming sinners: Christianity and desire among the Urapmin of Papua New Guinea. *Ethnology*, 299-316.
- Robbins, J. (2007). Continuity thinking and the problem of Christian culture: belief, time, and the anthropology of Christianity. *Current anthropology*, 48(1), 5-38.
- Willoughby, H. (2000). The sound of han: P'ansori, timbre and a Korean ethos of pain and suffering. *Yearbook for Traditional Music*, 32, 17-30.